直言

直言は日本社會主義の中央機關紙也!!!

（平民社電話　本局三三六二番）

●大軍備の兒戲

バルチック艦隊の全滅を聽いて、日本國民は驚喜措く所を知らず、此の壯擧以て日本の英名を世界史上に不朽ならしむるに足ると稱す、吾人は其の果して然るや否を研究するの必要なし、然れ共其の萬民が等しく學び得たる大教訓は則ち是れ也、「軍備必竟兒戲に外ならず」、敵艦撲滅に狂喜する無邪氣の民よ、戰後に於ける露國の第一問題は何なりと思ふや、軍備の回復と其の擴張と即ち是れならん、諸君は必ず之を一笑に付し去るならん、曰く是れ豈に兒戲に非ずやと、然り、露國の軍備回復と其擴張とは到底兒戲ならざるを得ず、獨り露國人民の苦痛を如何にせん、思ふに革命の氣焔旺盛なる露國人民は、極力以て其の軍備の回復擴張に反對するならん、露國を亡ぼすものは即ち「軍備」なれば也、

然れ共軍備の自國を亡ぼすものは獨り露國の特殊現象に非る也、實に萬國共通の常理なることを知らざるべからず、只だ國家萬民を犧牲として自家の奢侈と贅澤とを逞くさんと欲するもの、敢て之を斷行する也、

日本の政治家は揚言すらく、我等は決して侵掠を欲するものに非ずと、吾人は萬國の專制家より付て同一の僞誓を聞きたりき、然れ共日本の政治家は「君子國」の政治家を以て自任すと聞けば、暫く彼等の言ふ所を假信するとゝせん、然る後吾人は敢て日本國民に質問せざる可らず。諸君は露國に於て當然來るべき軍備擴張の亡國的兒戲を、日本に於ても演出せしむるとを容や否やと、吾人は日本に侵略主義の政治家あるとを悔く信ずると無かるべし、然れ共侵略主義の學者と論客と實業家と號する山師の存在するとは、諸君の承認せざるべからざる所なれば也、試に彼の學者と論客の言ふ所を聽け、彼等は今日に當て盛に日本國民の經濟の綽餘裕あるとを稱讃し、戰爭の以て何時までも繼續するに足るべきを揚言す、吾人は彼等が何を指して斯く言ふかを知らざる也、

彼等學者と論客とは都會の書齋に坐して權門に出入し、多額の俸給に生活して曾て社會の基本たる勞働階級の實狀を知らざるもの也、彼等の足一たび都城三里の外に出でなば、戰爭の爲に農村部落の慘狀如何に恐るべきかを了解するならん、強ゆるに官權を以てし、誘ふに高利を以てし、而して公債應募の豫定超過は國民經濟の豐裕を證するものとなすが如き、是れ學者論客の迂闊に非ずんば則ち僞善に非ずや、若し彼等にして「國民の苦難は思ふだに斷腸の悲痛に堪へずと雖も、是れ眞に已むを得ざる也と」言はゞ、吾人は兎に角彼等の眞摯を多とせんと欲す、其の事實を曲げて以て國民の苦痛を掩はんとするに至ては、其罪赦すべからざる也、而して彼の學者と論客とは此の如き輕佻浮薄の筆鋒を以て、正に戰後の軍備擴張を唱道せんと待ち構へつゝあり、

若し夫れ山師の徒に至ては其の必生の目的は「國家の光榮」の記號の下に同胞の幸福を犧牲として自家の懷中を肥やすに在り、其の陋劣元より言ふを待たず、然れ共是れが爲めに諸君は決して彼等山師を蔑視すべからざる也、利己的競爭の時代は、則ち山師跋扈の時代なれば也、看よ、學者も論客も相率ひて山師の門下に跪拜するに非ずや、政治家も將軍も山師の喜怒に一顰一笑するに非ずや、所謂愛國主義の最大標榜者は則ち山師なるに非ずや、近く之を米西戰爭に徴し、之を英杜戰爭に徴して其の然るを知る也、而して是れ實に世界將來の一恐怖也、然らば則ち非軍備論が吾人の胸底に一致する共同問題たるの理亦た明白也、「我は喜で戰ふものに非ず」と言ふの輩は又た必ずしも吾人と握手すること能はざるの人に非ず、只だ彼等の怜悧にして弱行なるや、容易に遁辭を搆へて曰く、是れ一國の問題に非ず、言ふべくして行ふべからざる也と、誠に然り、是れ實に一國の問題に非ず、萬國皆な心に憂へて互に發言を躊躇する普通の煩悶なり、而して是れが發言者として日本が尤も適當の位地と境遇とに立ちつゝあることは蓋し自他共に認識する所ならん、

日本國民よ、諸君は平和を愛することを以て光榮となすに非ずや、侵掠を好むものに非ざることを辯疏することに於て汲汲として曾て怠らざるに非ずや、吾人は此點に於て諸君に信賴せんことを欲す、然れ共千萬言も一行に如かず、若し諸君にして露國の專制家が當に計畫すべく、日本の山師が當に切望すべきが如く、戰後の第一事業として、軍備の回復及び擴張を贊助するが如きことあらば、今日までの辯疏と苦心と又た何の効果あらんや、吾人は明言す、政治の目的は「利己」に非ずと、

●誰か奪へる

樋口配天

神は命じぬ　ハタラケと
一望春野　土沃えて
緩き流れに　溝わり
鋤一跡に　麥一斗
豐けき秋は　腕に鳴る
いざや耕さんと　野に立てば
誰か奪へる　我が鋤を

神は命じぬ　ハタラケと
森綠なる　山里に
其木を一伐りて　家を建て
妻も迎へん　良き妻と
樂しき家庭　營まん
いざや伐らんと　森に行けば
誰か奪へる　我が斧を

神は命じぬ　ハタラケと
南の窓に　機一だい
日なたに頬を　染められて
親子似合ふた　縞からも
細手に運ぶ　梭の綾
いざや織らんと　機に向へば
誰か奪へる　我が梭を

●草も木も

樋口配天

草も　木も
惠の　露の　滴れる
母の　乳房を　含みつゝ
夜の　靜けさに　誘はれて
安けき　胸に　眠りけり
彼等の　夢に　入るものは
晝間　眺めし　人の世か
上に　燿く　ちさき星
下に　優しき　蟲の歌

草も　木も
東の　光に、覺まされて
今日を　さやけく　眺むとき
雀囀の　風の　そよ／＼と
霞の　幌を　捲きとりぬ
綠に　匂ふ　唇の
殘れる　乳の　玉の上に
廣き　望を　浮べつゝ
昇る　朝日に　輝けり

THE CHOKUGEN.

SOLE ORGAN OF JAPANESE SOCIALISTS.

Issued every Sunday.

Communications addressed to the Heiminsha, Tokyo.

Vol. II. Tokyo, Jun 4th, 1905. No 18.

THE VICTORY AND THE PEOPLE.

The great naval engagement in the Sea of Japan proved a victory of Japan. Our innocent people are almost madden to congratulate it throughout the country. The bankers in Tokyo held a meeting for the celebration of the victory. There were present the representatives of millionairs, the cabinet Ministers, generals, admirals, and the members of both Houses. It appears to us as a picture of Japanese bourgeoisie tied with the cord of capitalism, squeezing a collossal profit out of the war, and taking proletariat as its victim. But alas! Our innocent people are utterly blind.

EXPLANATION OF THE PICTURE.

The picture inserted in this number is a photograph taken as a memento of the Social Democratic Party which was disolved on the very same day of its organization, i. e. the 21st May, 1901. Those five men in the photograph were the founders of the party. The man marked A is Comrade Katayama who represented us at the Congress of Amsterdam last year, and now is in Texas, America. He is perhaps the first name noted in our labour movement. He had long been a student of a University of America and is a Christian. He is about forty five years old. B is Comrade Abe who is a professor of the Waseda University of Tokyo, and is now in America in a tour of a international base ball match. He had also undergone an education in American University and was once a preacher in the Unitarian church of Japan. He is now translating Marx's *Das Kapital*. He is about forty three years old. C is Comrade Kawakami who is now also remaining in America, having graduated the course of Iowa University a few years ago. He is about thirty four years old. D and E are respectively Comrades Kotoku and Nishikawa who are editors of the *Chokugen*, and are now in prison. Kotoku is about thirty five years old, and Nishikawa just thirty. F is Comrade Kinoshita who was chosen as the candidate of our party in the last bi-election. He is a solicitor, a journalist, and also an editor of the *Chokugen*. He is about thirty seven years old. We have no political party permitted by the Government, but the above mentioned names are generally looked upon as the leaders of the Socialist Party in Japan. And it is quite certain that fire of Socialism will turn up all the fields of Japanese society after the war.

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

日本之新聞

○國家的大賭博

日本と露國の大賭博は倏忽にして終れり。日本の勝利は固より大いに喜ぶべし、而も露西亞の敗衂亦大いに悲まざる可らず、更に之を兩國勝敗の外に超越して考察せば如何、數日二日にして大戰の形勢を決し平和の回復をして急に其歩を進めしめたるは、吾人の深く祝賀する所なり、然れども僅々二日の間、幾千生命の死傷を出だし、幾億財富の損失を來すを見て、吾人は此の國家的大賭博の狂愚と悲慘とを感ぜざるを得ざる也

○紳士閥の活劇

祝捷又祝捷、而して世に率先して最も目ざましかりしは銀行業者の祝捷なり、發企は銀行集會所と銀行倶樂部、出席せるは松尾日本銀行總裁、高橋勸業銀行總裁、添田興業銀行總裁、澁澤榮一、園田孝吉、豐川良平及び其他の面々、來賓には諸大臣、海陸軍武官、兩院議員及び其他の面々、是れ豈に最も鮮明なる紳士閥の活劇に非ずや、政府、議會、軍隊、而して其根底を爲せる者は資本家也、此四者相結合して祝捷會を開き、卓上の演說に相唱和して親交を訂す、戰爭の利益が何人の上に最も多きかを見るに足るべし

○軍人崇拜の愚

吾人は戰爭に反對するの故を以て軍人犠牲の心を輕侮する者に非ず、吾人は海陸軍將校が、其の精練せる技術を以て一死を輕んじて其任務に服するを見て、深く其良心に感激せざるを得ず、殊に無報酬を以て强役せられたる兵卒が、猶ほ且つ同胞の爲に甘んじて其命を棄つるを見ては、其の高潔美麗なる心情に對し、更に一層の感激なきを得ず、然れども意氣ある者、高潔なる者、美麗なる者、決して軍人に限るに非ず、農夫亦然り、職工亦然り、學校教員亦然り、詩人美術家亦然り、况んや東郷大將一人の功を云々するが如き、眞に愚の極と云ふべし

○損失發表の好時期

去年旅順の未だ落ちざるや、我艦隊の損失亦甚だ少からずと傳へられたりき、而も一々發表せられざるやの感ありき、然るに日本海の大海戰終り、國民其大捷に醉ふの時、突如として去年に於ける艦艇六隻の損失は發表せられたり、吾人は深く其損失を悲むと同時に、亦其の發表の好時機を撰びたる當局の智謀に敬服せざるを得す

○任務に斃れたる職工

海戰大捷の報至ると同時に、小石川砲兵工廠の職工數百名は火藥爆發の爲に死傷せり、手足分裂して四散せるが如き悲慘の狀は、今一々語るに追あらず、吾人は唯、當局者が是等の哀れなる者に對して必ず相當の善後策あらんことを要求するのみ、東郷大將も彼等職工も、其任務を盡せるは一也、願はくば吾人をして左の如き報知を信ぜしむること勿れ

△今回の事件に付き砲兵工廠にては極めて秘密を守り、憲兵を附して嚴重に警戒し、死傷者の數を隱蔽するの疑ひあり

△死者の葬式其他の費用は生殘れる職工に割りつけ最下等を一圓より給料に應じて三圓（以上）額の多きに及び、寄附の名を以て給料中より差引く由なり

○臨時議會召集の說

臨時議會召集の說あり、海陸軍大捷の威武に眩惑せる人民は、其の困憊の肩上、更に過大の負擔を課せられて、猶ほ且つ之を訴ふるの道を知らざらんとす、憐むべき哉

B　C　D　F　A　E

○鑛毒被害地谷中村の豊作

四五年來破堤のまゝ鑛毒水の浸入に委し置かれし谷中村一圓の土地は、先頃、粗末ながら新堤の修築ありし爲め、著しき收穫を見込み得たりと得ふ、概表左の如し

▲大麥收穫四萬五百八十石（一割五分作の割合）
△此價格金二萬七千七百二十圓
△小麥代金千九百四十圓四十錢
▲相當賃料の賠償（一反に付十圓の賠償）
△賠償總額金二萬七千七百二十圓
▲費、薪、天然肥料
△概略金五百七十圓
△收穫總計六萬九千〇〇圓四十錢
內堤防修築費二千七百圓
△純益六萬六千三百圓

右は麥作の期節に屬する收穫のみ、若し此後にて無事十二月に至らば、土地の時價は猶ほ十圓の騰貴を來すに疑ひ無し、之に大小豆の收穫を加ふる時は實に十一二萬圓の總收入が此一小村民の頭上に來るべき也、之は僅かに二千七百圓の堤防修築費によりて齎されし利益なるを聞かば誰か驚かざらんや、然るに此僅少なる費用を吝みにして、此肥沃なる土地を有せる村民をして數年間殆んど無收穫の狀に困窮せしめしは眞に怨むべき現象なり、其大原因の何邊にあるやは暫く措き、要するに此一村を廢滅に歸せんとの企圖に出でしは疑ふ可からざるが如し、あゝ何ぞ其殘忍なるや

△猶ほ同地に三百町以上の水田あり、內百町は勸誘によりて漸く稻を植付けたり、若し其筋にて一言新堤增築の事を公表すれば、人民は直ちに他の二百町にも植付を爲すべきに、今は空しく之を荒蕪し置けりと云ふ、惜むべき哉

吾人は今更ら日本政府の殘忍、酷薄、非道を喋々するの徒勞なるを知る、唯夫れ五千萬の民人が、此惡政府の下に呻吟するの同胞を空しく傍観するを見て、緑返して其腑甲斐無きを歎ぜざるを得す

●巢鴨だより

人は囚中の日月の長きを言へり、左れど此三ヶ月は僕に取りては殆ど彈丸の如く過去りて何事を考ふる暇もなき程なりき、唯だ讀し得たる讀書の稿は僅かに諸君の心思を勞せしのみ、イクヂなき事に慚愧に堪へず△社會に於ける我等の事業は多くの迫害にも拘らず日々發達を爲せりと聞く、數の自然とは言へ、全國同志諸君の勞苦と活動の如何に激しく且つ大なりしかを想ふに足る、殊に木下兄の三十二讓の如き寧ろ望外の好況なり快哉を叫ばざらんや、諸君は却つて此三ヶ月間に於て實に數年に價する仕事を爲せり、僕絶へず感謝の淚に堪へず△下獄後の讀書中、尤も興味ありしはボストンの教授レーン氏の The Level of Social Motion なりき、氏は社會進化の極致を推理して我等の理想と全く同一の結論に達し、殊に人口問題の如きは尤も滿足すべき解決を與へたり、謂らく、社會組織齊整の極に達せば、生死の率平均して人口は常にノーマルの度を保ち甚だしき增減を見ざるべしと、將來人口の無限に增加すべき憂なき由はベーベル氏婦人論の末尾にも詳細に論述しあれど、レーン氏の科學的討證は論理一層明白也、我等同志は之に依て此種問題解決に對する鋭利の武器を得たりといふべし、僕は又多くの愉快を以て Draper 氏の宗教科學衝突史を讀めり、是は古けれども今猶歐米同志の間にオーソリチーとして敬讀せらるゝもの、僕は此書を世の宗教萬能論者に推薦して再思を乞はんと欲す、ルナン氏の耶蘇傳も今回始めて見たり、傳記を著す如此きの雜なる可らず、僕のラサールの如きは之に比すれば豚犬のみ▲目下枕頭に在るは、堺利彦君の一人クロポトキン氏の「田野、製造所及工場」エンゲルス氏のフォイエルバッハ論なり、入監同様々丸善に問合せて得ざりしヘッケル氏「宇宙の謎」英譯本を黑岩君より寄贈され大に渴望を慰せり、願くば感謝の意を致せ▲第二外國語の課業甚だ遲々、數日前より小剣兄寄贈のお伽噺を讀み始めたり、日日少しづゝ字書に縋りて進み行く「アンヨは上手」の有樣にて覺束なく危なげなる中に樂み多し、愛玩措かず、同兄又佛語字典を送られたり、千萬感謝▲若し夫れ今の僕の宇宙觀、人生觀を問ふ者あらば、依然として唯物論者、科學的社會主義者なりと報ぜよ、今後六旬の讀書と思索とは思ふに此信頼を強くし固くするに過ぎざる可し▲寧齋君の訃哀悼の至り也、同君曾て先民先生のもとに圖して僕に送れる病中自筆の書簡あり、若し手紙雜誌などにて入用もあらば、荊妻に命じて取寄せられんことを乞ふ▲坂井犀水君のスケッチ、田岡嶺雲君の天譴、今如何、甚心頭に關す、切に其發達を祈る▲來る五日の公判は、まだ中々開かれさうもなし、斷り置く、僕夜間多く寐らず、宵にても曉にても月の東方の天に宿れる間は、病窓殘窓に限なく差入りて、僕は滿面に其淸冷々の光を帶びて、仰臥し居れりと知り玉へ、此頃は速夜東明の月を眺めたりき、今より旬日の後は宵月に對して物思ふべし▲岩崎革也君病氣如何、今猶病院に在りや、御序の節宜しく傳聲を乞ふ▲第三回の發信は去廿八日認めしも、詩歌ありしが故に許されず、本日更に書改むべき旨命ぜられしを以て後れたり、之を諒せよ

五月卅日

枯川老兄　　秋水拜

●編輯雜事

▲『通俗社會主義』は餘りに賣切れ〳〵となりましたからヤメに致します、跡はモウ幾らも無いのですから、そして近い中に、少し手を入れて五錢本にして出版します。

▲正誤　前號『社會主義の歌』の作者の名は『三十六節』では無くて『三十六郎』です

▲『つれ〳〵草』と題した前號の記事は、あれは兼好のつれ〳〵草の一節です。其思想も何となく社會主義的に出來て居る所が妙ではありませぬか、去方より御疑問ありたるに依り斯くは記す。

▲『我が行く道』に對する樂譜は、まだ色々研究中ですから、いづれ其中に發表しませう。

▲本號に揭げた寫眞は、去三十四年社會民主黨創立の紀念として寫したものであります、從つて諸君がまだ中々若々しき風采をして居られます。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

世界之新聞

○佛國社會黨の合同
『ルウエン大會の一大結果』

四月五日、巴里ルウエンに於ける、佛國社會主義ジョーレス黨（改良派）の總會は、遂に同國社會黨の諸派が合同に至るべき最後の階段となれり、然り、合同は實際に於て既に事實となれり、而して四月廿三日より廿五日に亘りて開かれたる全國社會主義團體の大會は、之を正式に宣言したる筈なり

△アムステルダムに開かれし萬國社會黨大會が「一國内に於ける平民階級が唯一なる如く、社會黨も亦た一國内に必ず一黨ならざる可らず」との決議をなせるは、其當時本紙の報導せし所なるが、佛國社會主義ゲエスド黨（革命派）は、萬國社會黨の忠實なる分子として早く之を承認し、且つ如何なる團體たるを問はず、此の決議を承認する者あらば、之と合同すべきことを宣言したりき、

然るにジョーレス黨は二派に分れたり、一は通常黨員にして革命主義の下に合同することを望む者、他は新聞紙及び議會等に於ける首領株にして其改良政策を棄つることを好まざる者、即ち是なり、されど同社會黨の意見は合同の方針に向て強く動きぬ、而してジョーレス黨は自ら之を宣言せざるを得ざるに至れり

△宣言は餘り長篇なれば茲に全文を掲載するを得ず、但し、其の要旨は、ゲエスド派、アルレマン派等の革命的社會黨と合同すべき事、及び、アムステルダム大會がなせる「一國一黨」の決議に對して充分なる信任を捧げ、以て之に降伏せんとを欲する旨を表示せるに在り、

△代議士、對、通常黨員　革命的社會黨員より見れば、ブロック（國會に於ける小紳士閥と穩和社會黨との同盟）の政策は補助政策を意味するのみならず、之れ寧ろ陥落をさへ意味する也、然るにジョーレス黨の代議士側に於ては尚は此ブロックに執着せんことを欲せり、全國社會黨委員は此政策を棄てんことを彼等に勸めたるに係はらず、ジョーレス及びブレッセンスを除くの外、彼等の總ては之を拒絶したり、是義に三月廿六日より廿八日に亘りて開かれしジョーレス黨の總會に於て暴露せし事實なり

△代議士側と委員側との間に於ける反對意見が假令絶對的なりとするも、總會（四月五日）は何れなり貴めざりき、然れども、總會は遂に委員の意見を維持し、代議士をして之に服從せしめたり、

△ジョーレス黨内に於ける問題は、今は明かに次の二點に歸せり、曰く、アムステルダムの決議を承認すべきや、曰く、黨は其代議士が支配すべきや、即ち是なり、而して總會（四月五日）は三日間の討論の後、遂に合同委員の宣言に協和して之を承認し、代議士側の態度は暗默裡に斥けられぬ、

△ルウエンに於ける討論　ルウエン會議に於て合同派（非改良派たる通常黨員側）と非合同派（代議士側たる改良派）とが三日の長時間を費して戰はせし論爭は最も激烈なりき、されど茲に一々記載するは甚だ煩に過ぐれば之を略す、

△唯だ其主なる姓名を擧ぐれば、非合同派には、アウガグニユーア、ブライアンドの諸氏あり、合同派には、デユコス、レノーデル、ウーレイ、ロンギユート（カールマルクスの孫）の諸氏あり

△而して兩側主張の大要を言へば次の如し、代議士側は曰く、代議士は如何なる支配と雖ども之を全國社會黨委員より受くるを拒絶す、全國社會黨委員は議會内の狀態に就て無智識なり、蓋し代議士に對しては委員は門外漢にして、門外漢は之を解する能はざれば也と、通常黨員側は曰く、社會黨は平民階級の團體なり、而して其總會が自由討議の上、決議せる事に就ては、總議員同等に服從するの義務あり、代議士は人民に選ばれたる者なりとの口實によりて之を區別するは理由なき也、アムステルダム大會は吾人に善き教訓を與へたり、此佛國社會黨一致の決議を承認せざる者は宜しく其黨より脱退すべき也と

△ジョーレス氏も最後に一場の演説をなしたりしが、彼は何れを非、何れを是とも斷ぜざりき、蓋し彼自身は既に合同に決し居るに係はらず、此二派の間に立ちて大いに苦心せし所なるべし、

△社會黨史の一轉機　斯の如く、同黨内に於て兩立すべからざる分子あることを示せるに係らず、合同委員の宣言は大多數を以て賛成せられたり、而して是れ一八九三年に於ける動亂以後、佛國社會黨進化の上に一大轉機を來さんとする也

△一八九三年に於ける動亂は社會黨の多數を分離して、或は改良黨に至らしめ、或は紛々たる小黨を樹立せしめたり、而して此時よりジョーレス派（即ち改良黨）とゲエスド派（革命派）とは相對立するに至りし也、

△然るに一九〇〇年にゲエスド派が一の革命主義の社會黨を組織して以來、其黨派は次第に强大となり既に改良主義の社會黨に二倍する大政黨となれる也、而も今や兩派の合同は成立せしならん、即ち四月二十三日に於て合同大會は開かれ、ゲエスド黨の全體とジョーレス黨の大多數（革命主義者）とは合併せられたる筈なり、

△而してジョーレス黨に屬せしデヴイル氏及びノーマンド氏は、ゲエスト氏の階級鬪爭の方策に一致する能はず、ジョーレス氏の理想的態度と人道主義を賛する旨を書してジョーレス氏に送り、同時に又た脱黨書をも送呈せり、

嗚呼百花爛熳として人の心も相和ぐ春の朝に於て、七年來引き續きし佛國社會黨の紛爭も其終りを告げんとすとは、之れウオカー記者の讃する所也、吾人は社會黨其もの丶爲のみならず、實に佛國平民全體の爲に滿腔の祝賀を禁ずる能はず、

世界の國會に於ける社會黨の勢力

國名	年	投票數	年	投票數	選出代議士數 前々期	選出代議士數 前期	代議士總數	議員百に對する社會黨の割合數 前々期	議員百に對する社會黨の割合數 前期
アルゼンチン	—	—	一九〇四	[illegible]	—	[illegible]	[illegible]	—	[illegible]
アウストラリア	一九〇〇	[illegible]	一九〇三	[illegible]	—	[illegible]	[illegible]	—	[illegible]
アウストリア	一八九七	七五〇、〇〇〇	一九〇一	七八〇、〇〇〇	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
白耳義	一九〇二	四六七、〇〇〇	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
ブルガリア	一九〇〇	二一、〇〇〇	[illegible]	九、〇〇〇	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
カナダ	—	—	[illegible]	八、〇〇〇	—	—	[illegible]	—	—
丁抹	一九〇一	四二、九七二	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
フイムランド	—	—	[illegible]	—	—	—	—	—	—
フランス	一八九八	七九〇、〇〇〇	一九〇二	八〇五、〇〇〇	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
獨逸	一八九八	二、一〇七、〇七六	一九〇三	三、〇一〇、七七一	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
大英國	一八九五	五五、〇〇〇	一九〇〇	一〇〇、〇〇〇	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
愛蘭土	—	—	[illegible]	[illegible]	—	[illegible]	[illegible]	—	[illegible]
伊太利	一九〇〇	一六四、九四六	一九〇四	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
ルクセンブルグ	—	—	[illegible]	—	—	[illegible]	[illegible]	—	[illegible]
那威	一九〇〇	七、四四〇	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
和蘭	一八九七	一三、五〇〇	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
セルヴイア	一八九四	五〇、〇〇〇	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
西班牙	一九〇一	二五、四〇〇	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
北米合衆國	一九〇二	[illegible]	[illegible]	[illegible]	—	—	[illegible]	—	—
瑞典	一九〇〇	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
瑞西	一八九九	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
匈牙利	—	—	[illegible]	[illegible]	—	—	[illegible]	—	—

◎備考

△此統計表は伊太利のドクトル、アレスサンドロ、シエーウイ氏の作りしものにして、記者は之を北米の「評論の評論」より飜譯せるなり

△此の統計表は過去二回の選擧の結果を調査せるものなり

△「評論の評論」記者曰く、北米合衆國に於ける一九〇四年（昨年）の總選擧に於ては、社會黨及び社會勞働黨を併せて其投票數四十三萬四千三百七十四なり

○英國失業者保護法案

荏苒久しきに亘りて提出せられざりし失業者保護法案は、首相バルフォーア氏に依りて漸く衆議院に提出せられたり、

△此法案は、先づ各都市の所在に從ふて區域を定め、區域毎に地方的の團體を設立し、又た其の全體を總括して一の大團體を組成する計畫なり、

△各團體の義務は本法を適用すべき要素を備へし場合に其失業者をして業務に就かしむるにあり、併し其失業者は之を二種に區別せり、第一は本人が如何に勞働を希ふも自己の力を以て之を得ると能はざる者に屬し、第二は元と貧民救助法の適用を受くべきものに屬す、而して各地の團體は此第一の部類するの失業者に對して職業を周旋するの任務あるものとす

△獨は此法案は職業の周旋と勞働の供給との間に重要なる區別を爲し、失業者に對する勞働の供給は之を中央部の職務として存し、又た其賃金の定額を立案するの職務をも之に保有せしめたり、但し其定額はロンドン全體に亘りて平等なるを要す、而してロンドン以外に於ては此團體を組織すること全く任意なりとせり

△レーボル、リーダー記者は此法案を評して曰く、ロンドン以外に於て此團體の組織を任意なりとせしは、此法案の大部の効を殺ぎたるものにして、今は之を以て、單に失業問題に對する政府の責任を免れしむるの辭柄を造りしに過ぎずとなすも不可なしと

假令斯の如く不完全なる法案なりとするも、昨年來屢々行へる失業者の熱心なる示威運動は、遂に此問題を實際の政策に入らしめたり、吾人は英國勞働黨の爲に深く賀せざるを得ず

○米國民主黨の二派

社會黨に對して關係深き報導は北米合衆國より來れり、そは同國民主黨が二大分裂を見んことを豫期せるもの也

△四月半ばの水曜日に於て、民主黨大統領たりしザエフエルソン氏紀念の晩餐會が、ニユーヨーク及びシカゴの兩所に行はれしは、民主黨二派の競爭を表するが如し

△ニユーヨークに於ける集會は昨年の大統領選擧に民主黨候補者となりて失敗せるザヤツヂ、パーカー及び其友人等の企つる所にして、平生、海關稅の減少、自由貿易等を主張する一派なり

△シカゴに於けるは、曩きに民主黨の大統領候補者として二回の選擧に敗を取りたる有名なるブライアン派の企てしものにして、同市長ダーン氏、クリーヴランド市長ジョンソン氏及び其他の民主黨首領達之に加はり、鐵道、電信の國有及び市營等の主張の爲にザエフエルソン氏を紀念すと聲言せり

吾人は常に世界に於ける政黨が、必ず紳士閥と平民閥との二派に分界せらるゝに至るべきを信ず、されば米國に於ける中間黨たる此民主黨が、早晩何れにか偏る可きは吾人の既に豫期せし所にして、今や其社會黨に接近せるブライアン派と、其紳士閥に接近せるパーカー派とが益々相隔離し行くは、寧ろ其當然なるを思ふ也

○濠洲勞働者の同情

濠洲メルボルン市の勞働會議所は露國勞働者の悲慘なる運命に深く同情し、先頃左の決議文を送りたりと

ヴイクトリア洲メルボルン市の勞働會議所は彼得堡に於ける武裝せざる勞働者虐殺の報を聞きて痛惜に堪へず、滿腔の同情を其親戚故舊に寄せ、遙かに露國勞働者の成功を祈る

○別項統計表に就き注意

△別項統計表は各國に於て社會黨の名を標榜せるもののみに就て調査せるものなる可し、故に社會黨の名を自ら冠らざるも、常に社會主義的活動を爲す者此表以外に多く存するを忘る可らず

△例へば英國の如き、代表者單に一人となせり、されど獨立勞働黨のケア、ハーデー氏、無所屬のジョン、バーンス氏、社會民主同盟のハインドマン氏、及び其他幾多の勞働黨代表者を有するとは吾人既に聞ける所也、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

●マルクスの學說

枯川生譯

△マルクスの學說の大要を平易に說明したる一書を作りたしとは、吾人の平生の願なれども、吾人の淺學と多忙とは未だ容易に之を許さず。吾人は此に於て、讀者諸君と共に漸次研究の步を進めんが爲に、英文社會主義書類の中より幾種か之に關する章段を拔き來り、並べ譯して本紙に連載せんと欲す。諸君姑く試みに讀解を厭はず、重複を忌ます、忍耐して之を玩味せられよ。

(一)イリー氏の說明(上)

(『佛獨に於ける近世社會主義』の一節)

マルクスの學徒が殊に誇とする所は、彼れの成せる二個の發見に在り。即ち歷史發展の眞解釋と價格論と是れ也。此二者は全然彼れの創說に非ずと雖も、彼れの之を組述するや、實に獨創的にして且つ顯著なるものなり。

彼れの歷史論は、歷史を以て一箇の發展なりとし、其各時期は、人民の經濟的生活に基き、貨物の生產分配せらるゝ狀態に依りて、其形を成すものなりと云ふに在り。彼れの出發點は、人は食はざる可からず、飮まざる可からず、着ざる可らず、而して雨雪及び寒氣を避けんが爲に住處を求めざる可らずと云ふの事實に在り。美術、宗教、科學の如きは皆是等根本の要求が滿足せられたる後に來ると爲す。故に奴隷を用ゐて富を產出するの法は古代史の形を成し、中世史の形は農奴及び其附隨者に依りて定まる。而して現代を支配するの思想は資本家的生產に在り、之を換言すれば、人民の大衆を工場に集めて、巨大なる諸機械と競爭を爲さしめ、而して雇用者が組織的に其利を奪ふに在り。

斯くの如く、歷史を以て生產上の必要に基きて發達したるものなりとすれば、過去諸時代の事跡亦必ずしも爾く無道なりと謂ふ可からず。少數の者が高等なる事物の經營に其身を委ぬる間、大多數の者が常に一般の苦役に服するは、亦止むを得ざる事なりしなり。生產方法の爾く幼稚にして不完全なりし時代には、多數の者が其の心身を開發せしむべき餘暇を有せんことは、到底不可能なりしなり。故に古代に在りては、奴隷制は必要にして且つ自然の事なりと認められたり。プラトー及びアリストートルは共に之を以て自然法なりと思へり。是れ猶は其後に於て土地及び資本の私有が自然法なりと假定せられたるに同じ。而も是等は決して自然法に非ず、固より時に應じて變化すべき人爲法なり。されば生產機關の私有は人間の私有(即ち奴隷制)と同じく廢止せらるべきものなり。然れども此廢止の行はるゝは、生產の技術が大進步を爲して、人間の生存及び進步に必要なる一切の物件が、大多數人民の苦役を要せずして產出せらるゝの時ならざる可らず。而して其時は來れり。今や文明の必要物件を產出するは實に容易にして、猶は各人に餘暇を與へて之を利用せしむるを得べし。アリストートルが奴隷制を辯護せるの語、實に豫言の如く聞ゆるものあり。彼れ其著『政治學』の中に曰く『僕婢は如何なる器械にも優れる器械なり。若し器械にして其主人の命に應じ、或は其主人の意を豫知して、自然に其目的を遂ぐる事あらば(即ち、梭にして自ら織り、琴にして自ら鳴るが如き事あらば)、建築師も僕婢を要せず、主人も奴隷を要せざるべし』と。此言たるや、恰かも近代に起れる機械の大發明が筋と骨とに代ふるに鐵と鋼とを以てしたるの事實を、暗に先見せるものゝ如くなるに非ずや。

封建の貴族政治も曾ては農工業を保護し指導するの任を盡せり。都市に於ける商工階級の發生は、遂に封建制度を廢物たらしめたり。斯くて封建制度は第三級團(即ち商工階級)の爲に其道を讓り、此の三級團は巨大の財富を集積し、勞働者を驅りて群集を成さしめたり。然るに此の資本家階級(即ち今の紳士閥)は、既に其使命を終り、今や邪魔物となり、妨礙物となれり。彼の恐慌の屢々來るが如き、彼の僅々數個の大富豪の手に絕えず財產の集積せらるゝが如き、畢竟是れ今の資本家が社會指導の任に堪へざるを示すものに非ずや。乃ち今や第四級團たる平民階級が、自ら起つて手綱を執るべき時となれり。平民階級は今や世界の歷史に大活躍を爲すべき地位に在り。

『生產の新方式の一切の利便を占有せる資本家制度の首領の數が常に減少しゆくに從ひ、悲慘、壓抑、束縛、墮落、掠奪の下に在る貧民群は、自然に其數を增さざるを得ず。而して又、此資本家的生產法の機關の下に敎育され、結合せられ、訓練せられたる勞働階級が、同じく常に其數を增して反抗するに至る。資本の獨占は、今の生產法の下に生育しながら、遂に其の生產法の桎梏となり、生產機關の集中と勞働者の結合とは、其外被たる資本家制度の介殼に比して、不相應のものとなるに至る。介殼は茲に破れ、資本家的私有財產の葬式の鐘は茲に鳴り響き、而して掠奪者は全く茲に掠奪せられ了る。』(以上資本論の一節)斯くの如くして人間發達の歷史に於ける、一層善良なる新時期は開始せらるゝ也。(次號は假林論)

●勞動者諸君是でも醒めざる乎

夕張炭山　らせむ

人の血に渴ける惡鬼は陸奧の安達が原にあらずして夕張炭山の黑煙さかまく煙突の下にあり、本年一月より四月迄の間、予の『勞働日記』より拔書せるもの左の如し

一月中△雜夫宮田重三郎(五〇)は機械場燃料炭運搬中炭車轉結環切斷せし爲め車間に挾まれて左下腿骨折傷を負ふ△雜夫佐藤喜三郎(四二)は貯炭場にて空車の爲めに下腹に打撲傷を負ふ△第二斜坑にて瓦斯爆發の爲め死を遂げしは淺井梅次郎、鈴木敏、佐々木卯八、高橋菊松、和田留三郎、伊藤德太郎、田川源二郎、魚住喜代松、稻與三吉、小田島喜代治、三村勇助、時澤松二郎、古庄登吉、高橋晋作、藤井庄平、早崎清治、今野新六、北村力三郎、吉田竹二郎、中里新治、吉田仁三郎、白根治三郎、山崎盛治、伊藤龜三、三村廣、村木庫三、菊地停三、伊藤爲左衞門、金野彦太郎、高橋儀介、吉田作助、伊藤勢吉、吉田慶治、淵波由五郎、佐藤東八、高橋興吉、三谷萬三、(一時に)△負傷者は、西村齊、佐藤佐吉、柳田岩吉、小野寺元吉、野口染吉、田中作次、三木興の助、西田源三、坂井傳三、酒井源吾、伊藤吉平、坂本金次郎、山田藤吉、國吉德松、石川多助、中尾登、山崎淺吉、本田甚三、東山宗作、島作與次郎、高山龜吉、和山幸一、山口德松、今井久作、石田榮助、佐々木俊亮、石川谷五郎、吉田竹二郎、(同時に)

▲二月中△運搬夫田中武平(三三)は第一新坑內にて落盤にて壓死△鋪夫藤原新三(四三)は斜坑々內にて肺臟肋骨挫折して即死△發車爬給係り根本光太郎(二〇)は風井坑に有足下顎骨折負傷△礦夫村上林三(三五)は風井坑に墜落して頭蓋骨腹雜骨折にて死

▲三月中△雜夫遊佐藤治(三八)は貯炭場にて丸太木倒れて左母指骨折負傷△鋪夫松木龜太郎(三一)は斜坑々內にて落盤の爲め頭蓋挫折して死

▲四月中△鑛夫森縣治(四三)は斜坑々內にて落盤の爲め脊椎脫臼の負傷△運搬夫菊野兼松(一八)は第一新坑々內にて四輪車の齒止めとなりて大腿部打撲の負傷△二番坑々內にて落盤の爲め一時に礦夫村田源之助、東大吉、運搬夫澤島吉五郎の三人は即死礦夫木谷幸一(三四)は負傷。

是れ豈に恐る可きの事實にあらずや、予は更らに玆に慄然として現今の勞働のいかに恐るべきものなるかを感じぬ。

嗚呼、誰れかこの恐れて忌むべき勞働を欲するものあらんや、生命ありて勞働あり、勞働ありて生命あるにあらず、食はんが爲めに働くのみ、衣せんが爲め、傷かんが爲め、死せんが爲めに働くのみ、死せんが爲めに働らくにあらず不具者とならんが爲めに働らくにあらず否斯く働かざるべからざる義務無きなり人をして生れも付かぬ不具者となる迄でも働かしむる今の資本制度こそ實に呪ふべきものなる哉。

□、諸君は社會富源の大黑柱なる事を、力に於て、數に於て、其勢ひの社會に並ぶなきを、然るを今玆に社會の怠慢なる尤も少數なる『資本家』なる者の爲に其の腕力と智識と健康と、更らに其生命とを犧牲として顧みざる乎、幷を以て幸福とせる乎、名譽とせる乎、希望とせる乎。

木下尙江著
良人の自白　中篇
近日發行、價三十五錢
『良人の自白』は著者の筆路層一層圓熟の境に入り今や人情の秘奧を說き盡して中篇の終れり、本月下旬には必ず發釘して讀者の前に獻めんと欲す。謹んで豫告す
發行所　東京市麴町區有樂町三丁目　平民社

●巢鴨だより

第三信―久しぶりに筆を握りて手紙を書かんとしコウ紙に臨める僕はたゞもう小供の樣にうれしい一方です△九月の廿六日が來ないと出られぬツヽだからマダ〳〵ナカ〳〵との感なきを得ぬし、既に三ヶ月を恙なく經過したとは僕にとりては愉快でならぬ、何んだか一事業を爲し遂げた樣な氣がします△勉强も健康も相變らずです、此の間又十二册も入れて貰ふたから少し急いで讀まねばならないと懸張り始めてゐる△此の月は一體に晴れ少かりしもたまに空が見事に晴れ渡り、五月の太陽が青葉を照す時には限なき愉快を覺へました△僕の監房の窓から桐が五本(勿論其末丈け)見へる、冬の中は何んの役にも立たなんだが、今は僕にとり大切な友達である、日に幾度立ち上りて之を見るか知れぬ△獄中は少し寒いので此の頃が一番よい氣候です、日の永いのと眠いのとに困る外は申分ありませぬ、眠い午後、ボンヤリ立て桐の葉を見て居ると雀の聲が聞へる、大空を舞ふ雄々しき其の姿は見へねど凛とした其の聲がドンナに僕の精神を鼓舞するか知れぬ△社の諸君は相變らずでしよう、併し多忙の爲めさぞ御疲れと御察し申す、國の方へ御手紙出して下すつて有難う△新渡戶稻造先生が親切な手紙を與れて何か差入れたいから君は何を好むか知せ玉へと言ふて與れたと云ふと書物は傳記物を望むといふ事を書き送つて下さい△松岡さんに「遺稿出來たら入れて下さい出版費集まりしや、都合で僕の金は流用して下さつても宜しい」△福田さん竹内さんに「此間は有難とう」△兒玉君に「毎度有難う、併し何時も許可にならんで殘念です、御出下さる代りに手紙下さい」△山口君に「ハガキ見ました、君なやみある由、自重加餐を望む」△小野君に「春秋の諸拜讀しました」△坂井君に「御蔭で藤の花にお眼にかかりました」とお傳へ下さい△各地の同志諸君が續々手紙を與れます、中に花の寫眞など送つて下さる方があります紙上で御禮を申して置いて下さい△此月は合計三十本手紙を貰ひました△さよなら△次の御手紙の時新刊二三乞教示

五月廿一日　西川光二郎

堺利彥様

▲手紙は毎月最後の日曜に書く事を許されるので即ち五月は廿八日が其當日であつた筈ですが、幸德君の手紙に依れば、詩歌を書いたゝめ最初のは許されなかつたとあります。西川君の手紙には何もそんな事は書てありませぬが、廿一日の日附になつて居る處を見ると、やはり書きなほさせられたものと見えます、西川君の、あの例の自然調や幸德君の、あの雄大な詩やを書くことを得なんだのは、我々の深く遺憾とする所であります(枯川生記)

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

●天才主義

「青年會館に於ける演説の梗概」

石川旭山

(一)　天才主義とは何ぞ

天才、天才、是れ四五年來、天下に喧しき題目なり。抑も天才とは何ぞや。曰く、智、情、意(眞、善、美)の一面或は全面に於て、人の常識にて解し得る法則を超越して發動するの才能に外ならざらん。「天子」といひ、「神子」といふ、天才の粹を言ひあらはせるものに非ざらんや。蓋し天賦の偉才を有すとの謂なればなり。

何主義、何々主義、是れ亦た近時頻りに聞くの語なり。抑も主義とは何ぞや。曰く、現在を理想に結び付けんとするの方針を言ふなり。國家主義と言へば、國家を以て人生を理想郷に導くの一手段となすの謂に外ならず。

然らば天才主義の意は自から明かならん。即ち、現在の文藝界、美術界、宗教界、政治界、あらゆる現在の各社會は、之を刷新するに須らく天才の出現に待たざる可らずと爲すなり。故に之を天才萬能主義といふ、亦た何の不可あるを見ず。然り、此の天才萬能主義、之れ吾人の固より賛せざる能はざる所なり。否、吾人は寧ろ此の主義の實現を以て、吾人社會主義者の本來の使命なることを感ぜずんばあらず。

(二)　天才は特殊の賦與に非ず

論ずる者あり、天才主義は個人主義にして且つ不平等主義なり、何ぞ社會主義なる平等主義と相合致するを得んやと。何ぞ然らん。乞ふ、先づ宇宙萬有の上に顯はせる天才の光輝の如何なるものなるかより說かん。夫れ天才は人の智慧を以て解し得るの法則に超越せるものなりと言ふ。されど宇宙萬有の現象、一として人間の智慧を以て了解し得るものありや。太陽、何が故に輝くや、鳥、何が故に囀るや、川、何が故に流るゝや、如何なる智慧を以て能く之を了解せん。我、何が故に活くるや、人、何が故に生るゝや、諸君、何が故に此の言を爲し得るや、如何なる凡人と雖ども天賦の能力無くして産るゝを得ず、生きるを得ず、又た言ふと聽くとを得ざるなり。然らば余輩の如き凡人も、亦た一の天才に非ざらんや。天才は特殊の賦與に非ず、普通の表現也。

世人曰く、天才の出現は奇蹟なりと。何の奇蹟ぞや。奇蹟とは、跛者の立ち、盲者の瞻るを言ふのみに非ざる可し。春に花咲き、秋に紅葉し、夏に蟬鳴き、冬に雪降る。宇宙の現象、豈に一のミラクルならざる者あらんや。換言すれば、宇宙其自身が大なる奇蹟に非ずや。此の奇蹟に依て生れ、此の奇蹟の中に奇蹟的生活を爲す、何人か奇蹟的天才ならざる者あらむ。而して此の天才の光を萬有の上に放射し、奇蹟の妙を總理する者は、實に宇宙の主宰なり。即ち是れ之を天才の本體なりと言ふべし。

(三)　今の人類界

此の如きは是れ宇宙の總觀なり。若し夫れ之を相對より觀る、地上の人類界は眞に痛嘆に堪へざるもの多し。見よ、權勢に據りて私慾を逞ふする者あり。虛榮に迷ふて人情を沒する者あり。此に於てか、天の榮光は地上に暗黒と爲り、天の奇蹟は地上に罪惡を來す。人、天に背ける也。ただ才能は其光を押沒けられし也。

思ふに天才の事を知るは天才に如く者無し。人の美は必ずしも天の美に非ざればなり。人の大となすは必ずしも天の大に非ざればなり。基督の言に曰く、ソロモンの榮華の極の時だにも、其裝ひ百合の花の一に及ばざりきと。然り、何十年の年月と幾十萬の生靈とを費して建立せる羅馬大帝國の權力は、之を一個の耶蘇が三年の福音に比して天地霄壤の差となすも足らざるなり。然らば今の所謂廿世紀文明は如何。金錢崇拜、資本家萬能の物質文明は如何。政治家は之に屈從し、學者は之を辯護し、軍人は之が犧牲と爲り、詩人は之が爲に謳歌し、文士は之が爲に讃美し、而して天才の美は全く沒して、俗惡醜汚なる物質の力は遂に地上を蔽へるなり。嗚呼諸君、若し眞の天才をして言はしめば、今の世界の人類が、醉ひつゝ、夢みつゝある廿世紀文明は、眞に是れ、秋草の葉末に落つる一滴の雫にだも其美及ばざるに非ずや。

(四)　社會主義――結論

社會主義は此の物質文明に反抗せんと欲して起れるなり。即ち社會主義は人間世界を絶對より觀て、何人も皆特殊なる天才を有する者と爲し、何人も其の天賦の才能を發揮するに自由にして平等なりと爲す。而して此の主義が個人天賦の才能の發展を妨ぐる一切の障碍物を打破せんとするは元と當然の事業なり。果して然らば、天才主義は到底社會主義に來らざる可らず、社會主義は獨り天才主義といふべきなり。

然り、社會主義の理想にして若し實現せば、其時こそ、宇宙の天才は圓滿に發揮せられ、眞と善と美とは渾然として融和合體し、燦然たる光は地上を遍照するに至るべきなり。

◎竹内餘所次郎氏の消息

曾て札幌に在って大いに吾黨の運動を助けたる竹内餘所次郎氏は、今や北米の西岸フレスノに在りて、桑港の新聞新世界新聞社の支社の事を預り居れり。それに就て氏の入社の辭に曰く「社會主義者たる余が之を用ゐる新聞社に從事するに就ては必ずしも之を主張せねばならぬとは定まって居らぬ、今日の制度が現存する間に矢張自己の生存を今日の制度の下に圖らねばならぬ。若し非社會主義の論文でも書かねばならぬ仕儀に立至れば、其時は我良心に問うて判斷し、自ら恐れ[illegible]の止むを得ざるに至るかも知れぬ。(然し)個人としての社會主義者たる余は支社員としては啻に誠實に其職務に盡さんばかりである」と。吾黨の同志は行末永く斯くの如き平靜沈着の態度も亦、我同志の甚だ必要とする所であらうと思ふ。

●「革命婦人」を讀む

孤劍生

新劇團を編して累々[illegible]に句ふ處、家に歸れて「革命婦人」を讀む、讀み了て我が胸に怒濤の如く叫び、我が涙は潮の如く流れぬ、[illegible]の主な所なりや、あゝ[illegible]の女性、[illegible]の化粧にわやかに、性[illegible]かざして鬪はんとせる[illegible]叔女[illegible]、一代の名聲を拋ち、千金の[illegible]、服を更して勞働者の群に入りては同盟罷工を煽動し、[illegible]の相談に與しては小作同盟を糾合し、「死」の接近を[illegible]地下の暗黒なる地下に活版器械を置て[illegible]を伸べて[illegible]、[illegible]如き關係[illegible]の目を掠めて秘密出版物の輸送を圖り、監獄に繋がるゝも[illegible]に[illegible]るゝも、[illegible]し、氷雪の中に立たしめらるゝも、[illegible]交々至るも、曾て屈することなく、暴惡なる[illegible]本家制度、腐敗なる貴族政治に向って戰慄なる[illegible]を續け[illegible]ある彼女の意氣の壯烈なるや、[illegible]年二十一、[illegible]群生する地下の暗室に、[illegible]、國外に追はれて、[illegible]を送りながらも、なほ故國の爲めに自由の警鐘を亂打し、革命の烽火を揭げんことに力めつゝあるブレシコフスキーを見ずや、

眼前千行の熱淚、社會の缺陷に泣き、[illegible]人生の[illegible]に激し、[illegible]本家の橫暴を叱咤し、烈風[illegible]に立ちては[illegible]に怒せよ、若し我を殺さば我は[illegible]人民の聞に蹶かん、我は早や言はんと欲する所を言ひ盡せり、汝[illegible]者にあらずんば我を殺せ」と獄[illegible]の病床し、[illegible]の孤島に流されて[illegible]と戰ひ、七十の[illegible]を以てして東奔西走、勞働者の慈母として、革命思想の宣傳者として其の努を惜まざりしイズミツヱルを見ずや、

あゝ青春燃ゆるが如き[illegible]へんに由なく、沸きたてる千斛の熱淚いくたびか[illegible]のさちなき者、[illegible]、内は[illegible]外は[illegible]、富み誇れる[illegible]み見て憤りに堪えず、廿三才の少女にして革命黨の領袖となり、[illegible]の自由の爲[illegible]にして[illegible]に近き、氷雨そぼふる[illegible]伯利亞の[illegible]に廿年の風霜を數へつゝあるウエラ、フヰグチルを見ずや、其の沈める玉の如き眼、青白き顏に[illegible]かれる金色なせる柔き髮よ、其の[illegible]鉄鎖に双の腕に縛せられながら[illegible]を叫んで止まざる彼女の[illegible]や、更に彼の卷末に記する所のカラ女四の[illegible]、正義の前に暴惡を叱咤し陰鬱暗黑なる[illegible]の中に[illegible]を以てなほ母の腕によるより樂しとせる[illegible]多の烈婦を、嗚呼露西亞乙女が胡沙吹きまくシベリアの荒野に大理石の如く白く冷やかに横はれる死屍こそ、それ我が社會主義の[illegible]べき苦石には非ずや、

見よ彼女が[illegible]を[illegible]いて出でたる[illegible]の如き叫聲は時間空間の存らん限りに遍徹して、歷史の波瀾の[illegible]へ傳へて世界の末日まで決して消滅することなかるべし、彼女の髮は半は白霜を[illegible]し、胸は躍り狂ふ革命の火を以て輝く使徒的精神に從はたらずや、余は敢て其の[illegible]を我邦の[illegible]なる婦人諸君に勸めん、婦人諸君よ下田歌子の如き[illegible]たるを以て人生の最大目的となす勿れ、女文學者となりて何々女史と支那人的代名詞に喚ばるゝを以て人生の最高名譽となす勿れ、「春は曙やう／＼白みゆく」など、[illegible]なる中古文學に親しむを以て人生の天職となす勿れ、人その友の爲めに生命を棄つるこれより大なる愛はなし、吾師ふかくして[illegible]群生する所三日食を得ず[illegible]を容めて飢を歎く同胞を救はざる、その[illegible]手を伸べ[illegible]を吐いて諸君の同性を凌虐しつゝある資本家制度を[illegible]る、あゝ汝の同性に自由を與へよ、光明を與へよ、闇黑より脫せしめよ、[illegible]より救はしめよ、小き蝋燭の如何に遠き光を放つよ、これロウマンチツク派の詩人が歌に非ずや、希くは我が社會主義の新劇を[illegible]してレバノンの香柏の如く高く且大ならしむべし、やさしき婦人のあた[illegible]淚をそゝがしめよ、吾人はこの「革命婦人」に依りて、ルイズ、ミツシエルや、ブレシコフスキーやウエラフヰグチルの如き、高潔[illegible]の如き婦人の生[illegible]來りて、我が社會主義の賢となり大となり力とならんことを祈るものゝ也。

◎運動基金募集

五月二十五日より卅一日までに受付けたるもの左の如し、同志諸君の義捐決して少きに非ず、吾人の收入可なりに多からざるに非ず、然れども吾人の支出は亦甚だ少からず、吾人は此上ながら猶ほ諸君の助力を乞はざるを得ざるなり

△金五圓　十六寸伸氏
△金二十錢　小石川　深川新兵衛氏
△金三十錢(第三回)　群馬　長加部寅吉氏
△金五圓　平民社　松岡文子氏
△金　圓　山形　藪原定次郎氏
△金九十錢　彦根　尾崎濱子氏
△金二十錢　廣島　伊藤信平氏
△金十錢　播磨　宮崎義道氏
△金一圓　岡山　山川均氏
△金五十錢　金鵄城下の一書生
△金五十錢　北越　桐野興藏氏
△金一圓　北海道　宮本氏
△金十五錢　京都　渡岡志計
△金一圓　群馬　川崎鉦右衛門氏
△金五十錢　山形市　岡崎茂右衛門氏
△金五十五錢　肥前　丸田英一氏
△金五十錢　金澤　本部仁太郎氏
小計　金十八圓四十錢也

●今日の會合

▲社會主義婦人講演　今四日午後二時より例の如く平民社樓上に開く、豫定の講演左の如し、會費五錢、男子は婦人に同伴せられて來會あらんことを希望す

△ベーベル氏の婦人論(二)　堺利彦
△先づ婦に火を投げ入れよ　菅谷いわ子

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

◎永久の滿月（上）

枯川生

△小生は今後本紙上に少しく短篇小説の樣なものを書いて見たいと思ひます。それに就ては先づ此一篇を見て置いて戴きます。此話は「三つ子の感化力」題して、一昨年の夏、家庭雑誌に載せたものであります。古いものを再錄するのは餘り失禮の樣ですが、少し思ふ所もあつて先づ之をお目にかけます。惡しからず御承知を乞ふ。

（一）　天、我に辛からば辛かれ

五年ぶりに海外より歸つて來た坂本覺馬は、今富士の麓に退隱せる舊友八木郁彦の家を訪はんとて、午前七時の一番汽車に乘込んで、新橋停車場を出發した。

覺馬は此の故國の土を踏んで以來、昔を思ひだす事が隨分に多かつたが、將來に對する或大なる計劃を抱いて居るが爲に、身も心も暫くは只それが爲に忙殺せられて、恣いまゝに追懐に耽る餘裕も無かつたのである。それが今、纔かに汽車中の閑を得て、寒からず暑からずの小春日和に、雑踏の東京を跡にして、舊友に會ふの望を持つて、小鞄一つ、ステツキ一本の輕き身を、餘り込みあはぬ汽車の中等室に半ば横たへて、そゞろに我身、人の身の昔を思うて、限りなき追懐の感に打たれて居る。

汽車は品川、大森、川崎と過ぎて行く。覺馬は卷煙草の煙の間に只夢の如く昔を思うて居る。五年前の殆んど同じ頃、日夕相往來して居た八木の家と我家とに、いづれ劣らぬ悲しき事が降つて湧いた。八木の家では三ツになる男の子が、其の姉娘の跡を追うて同じ病で無くなつた。我家では我が最愛の妻米子が急病で無くなつた。人の家も、我家も、忽ち火の消えた如くで、涙りがちに日を送つて、友達甲斐に互ひの愁を語りかはすのを、只せめてもの慰めとして居たが、我は終に其の無聊寂莫に得堪へずなつた。斯かる時、或人は酒に耽り、或人は遊びに耽り、又或人は更に新なる家を作るの望を起すのであるが、我には其の何れをも爲し得ぬのであつた。さればとて、我は或人の如く、徒らに泣きくづをれて、くよ／＼として一生を終る程の女々しき男でも無かつた。そこで我は終に蹶起したのである。何程もなき金を懐にして、或日飄然としてアメリカに向つて去たのである。

其時の我心は、今より思へば實に幼きものであつたよ。よし天、我に辛からば辛かれ、よし人、我に澁からば澁かれ、我は獨立の男子なり、天にも依らず、人にも依らず、我は只我力を恃むのみ、と思うて居た。よし我妻を奪はゞ奪へ、我子を奪はゞ奪へ、我等は妻子を奪はれて屈する者に非ず、男子悄に敗れて當に大いに爲すあるべし、天をも恨みず、人をも恨みず、我は只我力の更に強からざるを恨むのみ、と思うて居た。嗚呼嗚呼、愚かなる我心であつたよ。天に依らず人に依らずと思うたのは、其實、眞に天に依り、眞に人に依る事の、猶が足らなんだ迄である。天を恨みず、人を恨まずと思うたのは、其實、大いに天を恨み、大いに人を恨んで、反抗を試みて居た迄である。

汽車は平沼、戸塚、大船と過ぎて行く。覺馬は猶は昔を思ひつゞけて居る。日はやう／＼高くして、汽車の窓は暖かに照らされて居る。

（二）　芽を出せば折り／＼

覺馬の思ひは我身の上より人の上に轉じた。八木郁彦は元と相應の富家に生れて、小學を卒業し、中學を卒業し、そのまゝ進んで大學を卒業し、文官試驗にも首尾よく及第して直ちに高等官となり、東京生れの美人を細君に貰うて家を持ち、一年の中にお時といふ女の子をさへ得て、何一つ不足なき幸福の身の上であつた。或時我は彼に向つて「此世をば我世とぞ思ふ、望月の、缺けたる事も無しと思へば」と云ふのは君の樣な身の上の事で、君は是から藤原の道長と改名するが善いなど、戯れた事もあつた。それくらゐであるから、八木には隨分殿樣風な所があつて、自惚も強く、我も強く、何でも世の中の事は自分に都合よくばかり運んで行くもの、樣に思うて居たらしかつた。それで自然、思ひやりも少く、察しも足らず、我とこそは聊か相許す所があつて、特別に親しくもして居たれど、下の者などから慕はれるような男では無かつた。

細君はお久さんと云つて、まだ年も若し、美しくはあり、氣は利いて、若手の奏任官の夫人として、天晴れ似合はしき人ではあつたが、是も苦勞を知らぬ派手娘で、人形ならば抱いてやるけれど、シヽをしたり、ウンコをしたりする赤ン坊を、どうして私に抱けるものかと、それで濟まして居るほどのお嬢樣であつた。それで田舎に行くと云へば、島流しにでも合ふ樣に思ひ、貧乏人と云へば毛虫でも摘むやうに嫌つて居た。それでも自分の腹にアノ時ちやんが生れてからは、さすが母親らしい所も出來て、ツイ人の子を愛嬌じるほどの柔しさも付いて來て、大ぶん氣質が變つた樣に見えて居た。

それから八木夫婦がアノ時ちやんを可愛がつた事は又格別であつた。八木は自分の身がズン／＼と筍の延びる樣に、何の障もなくやつて來た如く、我子も亦その通りに、何の障りもなくスル／＼と成長して行くものとばかり思うて、何時も時ちやんの健康を誇つて居た。お久さんは又、健康の事など考へもそめぬ樣子で、唯時ちやんの器量ばかりを誇つて居て、人の子を見る時には、『マア可愛らしいお子さんですと』杯と愛嬌は云ひながらも、實は我子と見くらべて、一段我子に劣る所が、窃かに愉快であつたに相違ない。

われほどに可愛がつた時ちやんが、可愛ざかりの三つになつて、片言まじりで憎れ口を利くやうになつた時、或日突然ひきつけて、脆くも三日の間に無くなつたのであるから、夫婦の嘆は無理も無い事であつた。彼等は玆に始めて人生の悲慘を味はつたのである。始めて人生に不如意と云ふ事のあるを悟つたのである。而して、始めて彼等の身も亦他の人と同じ運命を免れぬ事を知つたのである。彼等の芽は始めて折られ、望月は始めて少し缺けたのである。お久さんは殊にあれから暫くボンヤリとして居た樣であつた。

それでも、あれから程なく、丁度代りを與へられた樣に、龍吉と云ふのが生れたので、夫婦は元氣を回復して、龍坊龍坊と寵愛して、時ちやんと二人分大切にして居たが、是が又虚弱な病身で、八木は「何に大丈夫」とすまして居るし、お久さんは又、例の器量自慢に餘念も無かつたけれど、丁度時ちやんと同じほどの大きさになつて、丁度同じ樣に可愛らしくなつた時、丁度同じ病氣を起して、忽然として無くなつてしまつたのだもの。氣の毒とも何とも云ひ樣の無い次第であつた。あの時の夫婦の萎れ樣は、實に打たれたと云はうか、谷底に落されたと云はうか、いづれにしても僅かに息が通うて居るといふ程の見えであつた。折角最初の傷が癒えて、二度目の若芽を吹きかけて居た所を、それを又むごたらしう折て棄てられたのだもの、夫婦があの樣に弱たのも實は無理の無い所であつた。

時ちやんも三ツで死に、龍坊も三ツで死んだ。此後幾人生れても、皆又直ぐに死んでしまひそうな心地がする。死ぬるほどなら生れないが善いものを、折角三ツまでも育てさせて置きながら、それを取つて行くとはアンマリ聞えぬ。と云ふのがお久さんの愚痴であつた。芽を出せば折り、芽を出せば折り、それでは此上の勇氣の出ようが無いでは無いか。と云ふのが八木の不平であつた。不平たらだら、愚痴たら／＼、八木家の望月は缺けて又缺け、今にも闇にならうとして居た。

丁度其時こちらにも災が降つて來て、涙と涙、愁と愁、悲しき事ども語りかはして日を過ごしたが、こちらは少し年も若し、子に別れたと妻に別れたとは又少し異なる趣きもあつて、とう／＼こちらは反抗心を燃したてゝ、あの通りにして飛びだした。其時あちらは頻りに萎れて、八木は官海に於ける立身の氣も挫けて、はか／＼しくは勤もせず、それにつけては健康も考へて、兎角引籠りがちになつて居た。お久さんは又、燃え立つて居た愛の火を消し盡して、氷の如き根を抱いて、冷い／＼心になつて、人の子など見るも厭、手に觸れば身ぶるひがする樣なと、横を向いて此世の暖い人情に背く身となつた。

其後は三千里かけ隔れて、ツイ半年一年も無沙汰をすれば、扨いつ何から音信いて善いやら、とう／＼それなりに音信不通、互ひに居處の分らぬ始末で、三年たち五年たつた今日となつて見れば、我身の上にも心の跡にも、變つた事が隨分に多いと同じく、必ず人にも變りがあらうが、果して如何に變つて居るやら。富士の麓の退隱と聞けば、それだけで既に趣味のある、頗る詩的な題目ではあるけれど、扨其人々の心の跡、あゝ／＼、樂しみな樣な、氣遣ひな樣な、何とも云はれぬ心地ではある。

汽車は國府津に着き、國府津を發した。覺馬は猶ほ頻りに思に耽つて居る。汽車は更に御殿場に着き、御殿場を發した。晝近き太陽はいよ／＼暖かに人を照して居る。

いざや汽車は覺馬の下るべき停車場に着した。

（第二回にて完結）

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

同志の運動

▲金澤の六日間　際雲生

△五月十三日、東京出發、途中の要務を終へ十五日金澤に着△十六日、午後平民社の延岡爲子さんの宅を訪問した、オツカさんと妹さんが非常に喜んで迎へて下すつた、延岡さんの宅は實に閑靜で、庭園廣く、薔薇や、菖蒲や、木蓮や、今を盛りに其美を競ふて居る、僕は此平和な家庭と此美はしき庭園が憫しくて溜らないので、明日から厄介になる約束で宿に歸つた△今日は東京の補欠選擧の日だから、朝から其事ばかり氣になつた△十七日、蜻島友吉氏が金石より來訪された、同氏と協議の結果此夜某旅宿の樓上に金澤同志の茶話會を催した、來會者は蜻島本部兄弟の僅か三人で、人數の上から謂へば寂しい會合であつたが、三氏の熱誠は非常の趣味があつた△僕は昨日の約に依り、本日午後から延岡さんの宅に厄介になる、茶話會を終へて歸れば、オツカさんと妹さんとが御馳走を拵へて待つて居られた△僕は明日出立するのだから今夜は十二時頃まで社會主義に就ての話をした△十九日、午前要務終了、午後出發の事になつた、午前本部喜太郎君來訪、同氏は停車場まで見送られた、僕は歸途信越の同志を訪ふ積りで午後一時十分の汽車で伏木に行つた、直江津行は午後四時出帆と云ふので宿の樓上に待つて居ると頓て若者來り汽船は昨夜來の颶にて出帆せずと、僕は實に失望したが、詮方がないから再び金澤に引返した、茲に又一夜延岡さんの宅で社會主義についての樂しい話をする事が出來た△二十日、朝飯を濟まして讀者田中仁太郎氏を訪ふ、氏は陶器に赤繪を書く職工なので既に工場に出た後であつた、然し幸ひ同氏の母堂と弟さんが居て、喜んで僕を迎へて呉れた、氏の母は實によく分つた人で僕が社會主義の話をすると、忽ち口を開いて「今も此子に其話をして居たのです、私共は此主義を實行する爲に働かねばなりません、ナーモシ日清戰爭以來何一つ宜い事がありますか、勞働時間は長くなる、賃金は低落する、勞働者は益々資本家の爲に苦められて居ます、私は日露戰爭が濟むと此主義も大に發達すると思ひます、此戰爭に行いて大抵の者が目を覺すでせう、是れで醒めない者は餘程の大馬鹿者です、私の宅にも時々刑事が來ます、然し私には誰が何と言つても社會主義と離るゝ事は出來ません、政府が何と言つても構はない、今の政府の言は微塵も信じられません開山上人も耶蘇も皆時の政府からは苦められました」此話を聞いた僕は感骨髓に徹した、讀者諸君、是れ貧しき職工の母の言である、八人の子供を抱へて其日の生活に追はれ他を顧る暇なき婦人の言である、吾人が日本の勞働者未だ醒めずと嘆じて居る中に斯の如く醒めた婦人がある、政府は一生懸命に鐵壁的陣營を退ふして居るが、醒めたる此一婦人の前には既に堂々たる政府の權威が存しないではない乎△出發前爲二の記事がある、其一は延岡の妹さんが社會主義の歌はどんなに歌ふのでせうといふから、僕は途に詞吟をやらせられた、今一つは姉さんが然るか知らないがと言つて數枚の寫眞を出された、其中に爲子さんの數年前撮られた寫眞があつた、裏を見れば美しい水莖の跡で「みにくかるかたちうつして何かせむ、うつさまほしき我がこころかな」と書いてあつた△僕は此の平和な家庭と美はしき庭園とに別れ、妹さんに停車場まで見送られて、廿一日午前十時五分發の汽車で金澤の地を後にして、歸京した。僕に取りて金澤の六日間程樂しい事は是迄にない。最後に僕の今回の旅行につき便宜を與へられし同志諸君に謝す。

▲九州傳道行商日記（七）　小田頼造
（鹿兒島市より）

▲五月十四日（晴）朝水俣を行商し、素封家で社會主義を少々研究してるといふ某氏を訪ふたら「社會主義には根本的に大反對です」と劍突を喰はされた。何んとなりと勝手な熱を吹いてろがよい。正義人道の大旗を推立て、團結せる勞働者が正々堂々進軍する時汝等は最早斯かる囈語を吐くを能はざるべし。村長深水頼資氏を訪ひ車を修繕さする爲め今日一日滯在した▲十五日（雨）車の金輪も月の輪も新装されたので車が大分引き易くなつた。出掛けに勞働者を頌れた宿屋の主人に本を貸つた。雨の晴間に總の茅屋靜かな海、青碧の島澄清の空なども見れば丸で繪にある蓬萊島のやうである。雨に洗はれて清一新となつた天然の景色は眞に美の極だ。今夜は高尾野村泊り▲十六日（雨後晴）佐賀縣に這入つて言葉の解らないのに弱つたが、鹿兒島縣に這入つてから一層解らなくなつた。村民相互が雜話してるのを聞くと丸で支那人同士が譚てるやうで薩張り解らない。殊に此國に入つて吸立つて見へるのは兒童が短かい衣服を着けてるとだ途中の茶屋で天草島のお爺さんが土産にするとて本を買つて呉れた。新らしき救世の福音を土産にする程尊き土産はあるまい。阿久根村にて濱崎休三郎君に面し同村波留の宿屋に泊り兵有志家中村靜奥氏等を訪ふた▲十七日（晴後陰）早起出發阿久根村より川內迄七里半餘の道は多くダラ〳〵阪で平地といつたら少しゝかない。併し西方迄四里の間の道路は多く海岸に沿ひ、渺茫たる大洋を眺め、萬里の洋風が懷裡に入る氣持といつたら無い。夕方川內に着き宿を定めて夜青年傳道師江口篤生君等を訪れた。後江口君來談▲十八日（晴）朝市中を行商し十二時前江口君と同道して出發。途中基督教と社會主義との關係に就て議論しつゝ進行したが最後に得たる結論は何れも極端に偏するは惡るい。社會の改良が必要なる如く個人の內心を開發向上せしむることも必要であるてふことであつた。江口君とは川內より三里の串木野で別れ、西市來村に讀者を訪ひ、黃昏湯田の宿屋に着き、夜國府寡儀氏を訪れた所同氏は折柄來會された同氏の友と二人で僕に向つて種々の質問を發せられた▲十九日（晴）此頃は毎日〳〵人家少き阪路ばかりだ。喜過谷生川に着き、茶屋に車を預けて中伊集院に行き、それより恐ろい山路を一里半歩いて上伊集院村字直木なる中馬誠之助君の宅に着いたのは五時半頃であつた。中馬君は態々僕を中伊集院まで出迎へられたそうなが、不幸にして相互に顏は見ながらも言葉を掛けざりしため夕方疲れた足を引いて歸られた。眞情誠に感謝せねばならぬ。薩摩は山嶽ばかり多いが、此地は又甚しい山の中。此山間の僻里に同君の如き熱誠なる同主義者が居るかと思ふと實に嬉しい夜遲く一時頃迄談話した▲二十日（雨）中馬君と午後中伊集院に歸り、同君と市中を行商し、馬車で彦生田に行き、泥濘の惡路を車を引いて薄暮鹿兒島に着き、長田町なる中村旅館に泊つた。中馬君は雨の降る中を此所まで徒歩して見送つて下さつた▲此一週日に於て九十五冊の社會主義書類を賣つた、

▲大阪平民社茶話會

忘るべからざる五月廿日、雨であつたにも拘らず七名の同志は此日を紀念すべく集まつて來た、予は平民新聞廿七號にある木下さんの論文を朗讀して開會の辭に代へ、次に高尾、藤原の兩君は火の柱の梅子が深夜篠田を訪ふて語る所を表情的に朗讀した、これは仲々の上出來、あとで茶を飲み乍ら擴跋で謀題して滑稽的短話を蒔つ〳〵やつて十時過散會した（森近生）

▲葵同志社　（京都府）

△去る五月十二日午後、豫ての同志會合す、會するもの約六名決議大要次の如し△同志の結合を葵同志社と稱す△社會主義の研究及び、傳道を唯一の目的となす△毎火曜日定期會を開く△本部を京都府相樂郡加茂村字里山中敬太郎方に置く

▲社會主義研究會（平民社）

去る廿八日午後七時より開會、久津見息忠氏の「無政府主義」の講話に次ぎ、木下尚江氏の「社會の改革と道德の配慮」あり、夜の短さと、講話の長かりしと、爲に例の來會者の演說を試むの時間無く、小野有香氏の新體詩「斷頭臺」の獨吟ありしのみにて十時閉會せり、當夜は久ぶりの故か來會者約六十名、狹き樓上にギツチリ一パイ、さなきだに蒸し暑かりし此夜を、誠に諸君にお氣の毒でした、モウ平民社樓上は狹くてイケません、何處か廣い所を借りねばなりますまい。

●同志茶話會

麻布、赤坂、芝方面の同志を中心として來る六月四日（日曜日）午後六時半より拙宅にて茶話會を催し度、遠路お厭ひなき諸君は奮つて御出席を願升

但し會費不要、街鐵にて降車の人は青山御所前、夫より五丁ばかり、目標に灯燈を出して置き升

麻布區霞町四番地
岡千代彦

●新刊紹介

▲詩人シルレル（帝國文學臨時增刊）　シルレル逝て一百年を經ぬ、時代は彼の跡に幾多の人才を輩り幾多の人才を生めり、されど獨逸は未だ彼の如く偉大なる者を有せず、世界は未嘗てゲーテと彼の如く光榮ある兩星を有せざる也、彼はゲーテに後れて生るゝと十年、ゲーテに先ちて死すること二十八年、ゲーテの八十三歲の長壽に比して彼は實に三十八年の生涯を少なくせられたる也、彼が殆ど人生の半に過ぎざるの短生涯に在て殘し得たるものを思ひ、能くゲーテと共に一代の文權を掌握せしことを想ひ來れば、吾人は其產物と事業とに對して實に多大の尊敬を拂はざる可からざるなり、今ま帝國文學の諸氏は最も忠實なる筆にてシルレルの人格と事業とを精細に序述し、以て彼が逝去の百週年を紀念せんとす、吾人は其勞を多とすべし本書はシルレルの少年時代より末年に至るまでの大略及び「ロイベル」「フイエスコ」「カバーレー、ウント、リーベー」「ドン、カーロス」「マリア、スチユアルト」「ユングフラウ、フオン、オルレアン」「ブラウト、フオン、メシナ」「ウイルヘルム、テル」等の八大戲曲を各記者分擔して評論し、其の他ゲーテとシルレルとの交誼、思想家、詩人としてのシルレル、及び逐運記、著述目錄、參考書七、八十種、及び挿込畫十四五種を加へて編成す、四百餘頁の大册をなせり、文學に志す初學生は必ず一讀せざる可からず、アントン、グラツフ氏の筆になれる第一頁の像は、目、深く輝き、鼻、高く、唇は鋼鐵なして突出し、頭髮房々として肩に垂れ、其の沈鬱たる姿は恰も火山の胸中に潜むが如く、讀者をして「ロイベル」を再讀せしむるに到らんなり（神崎生）（定價四十五錢）

▲やみのちから（落合渓雄氏譯）　原作者はトルストイの、のとなり、其篇中に閃ける崇高なる理想、峻酷に寫されたる暗黑なる社會、慘な人の肺肝を衝くものと言ふべし、されど譯詞の餘りに熱せざると、調子ハヅレの言葉多きとは、讀者の想像をして其實境に迫らしむるを妨ぐるべし、「斯の如き立派な作を無雜作に譯して其の如くにしたのは誠に譯者の恥づる處」と迄に自ら謙遜せる著者としては、餘りに無雜作に書き放したりと言ふべからずや、一言以て譯者の反省を促すと云爾（定價三十五錢　本鄉四丁目文明堂）

▲圖書の新趣味（竹田次郎氏著）　著者は平生普通教育に從事せる人にして、本書は數年來苦慮研鑽の結果に成りたるものなりと言ふ、「圖書の初等教授」「略畫法」「圖畫法」「塗板畫」等に綱を分ちて頗る趣味ある實際的方案を說いて居る、殊に「略畫法」の綱中に示せる幾百千の例圖は如何に圖畫に無器用なる人にも、能く其趣味を解せしめ、直ちに自ら筆を執つて之を描かしめ面も面白く自在に手本に模するを得せしむ、小學校の教師、子女を有する父母、弟妹を有する兄姉にして圖畫を嗜む者は勿論、圖畫の趣味を味はんと欲するものは、本書を以て座右の伴侶となして可なり（定價八十錢神田裏神保町光風館）

▲新古文林（第一卷第一號）　發刊の辭に曰く「新しき者も可し、古きものも可し、律ざ者は新古を問はず佳なり、而して佳き文章は何度讀みても面白きものなり、これ此雜誌が新と古とを問はず、佳き文章を併せ掲げて、新古文林と題したる所以なり」と、古今の文士評論のあらゆるものを拾ひ掲げて菊判三百餘頁の大册をなせり（一冊十八錢　近事畫報社發行）

▲三寶叢誌（二五四）　京橋築地令知會
▲日本人（四一一）　神田雉子町政教社
▲六大新報（九五）　京都葛野郡二人塚其發行所
▲東京經濟雜誌（一二八七）　京橋彌左衛門町其社
▲東洋學藝雜誌（二八四）　神田三崎町東洋學藝社
▲活宗教（一七）　芝二本榎町其社
▲慶應義塾學報（九〇）　芝三田同塾
▲ハガキ文學（二の八）　小石川久堅町日本葉書會
▲教界時事（五四）　麴町上二番町其社

●平民社より　枯川生

▲平民社の財政に就て諸方より色々とお見舞を受けました。謹んで茲に謝意を表します。平民社の營業は甚だしく政府の妨害を蒙るに係はらず、存外好景氣であります。『直言』の發賣高は約四千五百部、之を二月頃に比べると、少しづゝジリ〳〵增加して居ります。

▲警察が御苦勞にも郵便局に就て一々讀者を調べ、或は其本人を害め、或は其父兄をおどかし、或は又賣捌店に就て此樣な新聞の取次をするなと嚴命し、種々の手段を以て『直言』讀者の減少を計つて居るのに、それでも猶は發賣部數が少しづゝでも增して行くとは、實に我々に取つては嬉しさの限りで、政府に取つては嘸かし忌々しさの限りであらうと察せられます。

▲出版書籍の賣行も可なりに宜い方です。『火の柱』は第八版になりました。『良人の自白』は第三版ですけれど、此方は一版の部數を倍にしましたから、『火の柱』と同じ勘定にすれば第五版になつて居ります。木下君は大分平民社にもうけさせて呉れました。其外大がいの本は再版三版になつて居ります。尤も平民社の本は商賣の駈引が下手なので、利益は甚だ薄いけれど、それでも損をしたのは一つもありませぬ。外の出版屋の內情を聞いて見るに、隨分澤山な廣告料を使つて、三百部しか賣れなんだと云ふ樣な話もありますが、平民社の本で二千やそこら賣れないのはありませぬ。と云つて是が我々平民社員の手柄であるとは毛頭うぬぼれませぬ。是は畢竟この主義、この運動の機運がさせる事で、即ち同志諸君の力に外ならぬのであります。

▲然し平民社には色々營業以外の出費があります。其の同志の倶樂部たる性質に於て、其の運動の中心たる點に於て、殊に近來は裁判事件、入獄事件、追悼事件等に就て、一々說明の出來ぬ支出もあります。それで是までの處は常に同志諸君の寄附に依つて、纔かに收支を償はせて居るのであります。然るに、先月來毎號記した通り、國光社に對する賠償金の月賦（毎月五十圓）、共產黨宣言事件の罰金（未確定ながら）などが、此頃引續いて押寄せますので、社中一同大に痛心して居る次第であります。別項運動基金の記事御參照を乞ふ

▲共產黨宣言事件の公判は明五日午前東京控訴院に開廷せられます。幸德君は矢張りまだ出廷し出來かねる樣子です。さすれば今度は多分西川君と小生との分けを引放して先に公判に附せられる事と思はれます。

▲お待兼の『良人の自白』の續篇は、今月中旬に中篇だけ出版いたします。詳しくは別項の廣告にて御承知を乞ふ。下篇はいづれ秋の事になりませう。

▲久津見厥村君の『無政府主義』、深尾韶君の『小學教員の生活問題』いづれも原稿は既に出來あがつて居りますが、都合あつて九月に發行する事に定めました。

▲此前の西川君の手紙にあつた、平民社の裏庭の枯木にまつはつた蔦の葉は、此頃非常に能く茂りあつて居ります。其外、八つ手の大きな若葉、しほらしい楓の若葉、秋海棠の若芽、菩提樹（？）の大きな葉などが、この狹い庭の趣きを成して居ります。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

◎倉田櫻芳君譯(西洋名畫挿入)
寫實小説 兄と弟
◎總クロース最美本全一冊 定價六十錢郵税八錢

想ひも寄らぬ邊に大秘密の伏在せるを許發せるは之れ▲大秘密に伴ふ大煩悶を描寫せるは之れ▲財産爭ひ妻爭ひに關する兄弟間の嫉妬心を説明せるは之れ▲原著は社會の墮落就中女性の虚僞に對する煩悶のために狂死せし佛國西寫實小説派の名手モーパッサンの傑作にて作中人物個々心理の剖解最も精緻功妙を極めつ眞に肉飛び骨裂くるの慨あり▲蓋し文壇近も難き好讀物にて現在歐洲文壇に大勢力を振ひつゝある寫實小説の眞意義と眞價値とを會得し得らるべき也

發行元 東京彌生町本郷三 金色社
大賣捌 上田屋 東京堂 東海堂 北隆堂

女鑑
毎月一回六月一日發行 第拾五年第六號
定價一部廿錢六部一圓十錢郵税無料

●口繪加納子爵の家庭●伊知地大佐と看護婦●滿洲演劇●各國美人風俗●暹羅女學生上田及群馬高等女學校職員並卒業生外數種●現時婦人界の二大問題(社説)日本婦人の二大迷想(村井知至)觀提と女子商業(嘉悦孝子)男女混合教育(某氏談)小楠公(大町桂月)澤柳學務局長夫人を訪ふ●家庭に於ける露帝●對妻談●我邦の婚姻●家政と化學●簡易なる看護法●當季食品●卒業生に告ぐ(鈴木校長)女學生英語研究法(山下博士)滿洲婦人と演劇●日本國名の由來●若き未亡人●女學生と新聞紙●米國通信●小説蛇窟江見水蔭●姫松物語●忍ぶの日記其他

發兌 東京々橋區築地二丁目 國光社 電話新橋八八番

辯護士 花井卓藏
東京市神田區錦町一丁目二番地 電話本局八八三番

辯護士 今村力三郎
東京市神田區今川小路二丁目十四番地 電話本局一九四〇番

世界第貳等
純良 金鷄(きん)ミルク
製造元 伊豆國三島町 花島煉乳場
發賣元 東京大傳馬町壹丁目 逸見山陽堂
電話浪花貳百拾五番

辯護士 卜部喜太郎
東京麹町區上六番町二番地 電話番町六二六番

活版印刷
東京築地 株式會社 國光社
電話新橋 二六三九番
特電話 八八番

ライオンはみがき 赤鑵入
体裁優美にして能く香氣を保ち頗る携帯に便也

トルストイ作
萬朝報記者 田口掬汀君序
萬朝報記者 落合浪雄君著
悲劇 暗の力 (再版)
▲四號かなつき美本▼(定價卅五錢、郵税五錢、郵券代用一割増)
大好評初版忽ち賣切れ再版出來
發行所 東京本郷四丁目五番地 文明堂

辯護士 高木金之助
東京市日本橋區吳服町六番地 電話本局四八六番

早稲田大學生 教育に經驗多く、人物確實、英語を能くす、報酬多く望まず子女教育の任に當りたし、好意者の周旋を願ふ
申込は 平民社内 熊谷宛の事

家庭雜誌
●三巻六號(六月二日發行)
○いちご會(小説)
○婚後半年所感=若き男女の不心得●女學生と妻●妻の苦情●煩悶●家庭の讀物●互の忠告●女は嫁すべきもの●妻の呼び方
○愛になれる夫婦關係
○我か花園(ミーアの詩)
○菜食の話(講演)
○菜食料理のかず〳〵
○野菜と果實
○カアさんのお話材料
○一葉園藝=●薔薇の話●朝顏の牡丹咲●薔薇の種類
○大家庭と小家庭(ホーム、ザヤ、アル所載)
○家族數問題(譯)
○讀者の顧問(筆ついで欄)
(定價)一冊六錢▲六冊三十二錢▲十二冊六十錢郵税不要
發行所 東京芝區新堀町三〇 由分社

●書籍取次販賣(郵税無料)
●社會問題解釋法(安部磯雄著) 價一圓廿錢
●廿世紀之怪物 帝國主義(幸德秋水著) 價廿五錢
●百年後の社會(平井廣五郎譯) 價六十錢
●小説 勞働問題(堺枯川譯) 價卅五錢
●社會主義概評(島田三郎著) 價三十錢
●社會黨(西川光次郎著) 價十五錢
●產業組合手引(森近運平編) 價二十錢
●靑年と生存競爭(安藤毛吉著) 價二十錢
●家庭の新風味(堺枯川著) 價壹圓
●家庭夜話(同上) 價壹圓
●枯川隨筆(同上) 價二十錢
●我家の犬猫(同上) 價八錢
●トルストイ翁 日露戰爭論(平民社譯) 價八錢
取次所 東京市麹町區有樂町三丁目 平民社
取次所 大阪市中之島宗是町田簑橋南詰 大阪平民社

●百年後の新社會(堺枯川抄譯)
●理想鄕(堺枯川抄譯)
●ジョン・バーンス(西川光次郎著)
五錢本之部 一部價五錢郵税二錢 但二部以上郵税不要
發行所 東京市麹町區有樂町三丁目 平民社
取次所 大阪市中之島宗是町田簑橋南詰 大阪平民社

平民文庫出版廣告
●社會主義入門(平民社同人編) 定價十錢
●消費組合の話(石川旭山著) 定價十二錢
●地理上の理想國 瑞西(安部磯雄著) 定價十五錢
●社會民主黨建設者 ラサール(幸德秋水著) 定價十五錢
●土地國有論(西川光次郎著) 定價十五錢
●富の壓制(西川光次郎著) 定價十錢
●經濟進化論(田添鐵二著) 定價十五錢
●小説 火の柱(木下尚江著) 定價卅五錢
●小説 良人の自白(木下尚江著) 定價金卅五錢
●革命婦人(平民社同人編) 定價十二錢
(以上總べて郵税を要せず)

傳染病研究所 養生園 東京病院 其他各病院御用
專賣特許 アルボース
ペスト、赤痢、コレラ等の傳染病を恐るゝ者は日常アルボース石鹼を使用せよ又しつ、ひぜん、田虫等の皮膚病及諸やけ、垢切れ等の凍傷病一切にも有効なるとの世評高し▲定價原液一斤入金卅五錢通常液一斤入金拾三錢同卅五斤入金二圓▲石鹼大形金拾三錢同小形金八錢
東京深川區東扇橋町五番地 扇橋製藥株式會社
▲賣捌所 全國各藥店及び小間物店

大和田建樹先生編
美文和歌 夕月夜 (再版出來)
▲正價郵税共三十八錢▲郵券代用無差支▼
待宵會一門の歌文集なり或は春花の芳を競ふが如く或は秋草の野に咲き亂れたるが如し女學生諸君が作文詠歌の良參考たらん

天眞爛熳 (三版出來)
▲正價金十三錢郵税二錢▲郵券代用一割増▼
無邪氣なる小兒の言行を集めたるものなり怒れる人も泣ける人も之をよみてほゝえまぬはなかるべし
發行所 東京牛込區東五軒町 婦女新聞社

▲本紙定價 一部三錢五厘、廿部前金六十五錢、五十部前金一圓六十錢、郵税不要
▲廣告料 一行十九字詰三十錢
▲注文 は總べて前金に限る
▲郵券代用 にて御送金の場合は必ず一割増とし成るべく五厘の切手を用ひられたし
發行兼編輯人 原眞一郎
印刷人 山田金市郎
發行所 東京府荏原郡入新井村字新井宿二五五七番地 直行社
發賣所 東京市麹町區有樂町三丁目 平民社 電話(本)三二六二
印刷所 東京築地二丁目十一番地 株式會社國光社 電話新橋八八、新橋二六九三番

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY